

親の願い、それは
“今すぐこんな支援がほしい”



働く者のまち、川崎。かつて川崎は若い勤労者が全国から集まり、この地で次々と新しい家庭をもちました。その家庭に子どもが生まれると、仕事と育児を両立したいという切実な願い・要求が起こりました。こうしたなか、市民の大きな運動と伊藤三郎革新市政のもとで、公立保育園が次々と増設され、「子育てするなら川崎で」といわれるほどになり、各地からわざわざ引越してくる人が相次ぐほどでした。

こうして新設された公立保育園は、当初から、長時間保育・乳児保育を行ない、その後、障害児保育・産休明け保育・アレルギー体質の子への除去食の開始・延長保育・地域の子育て支援活動(育児相談)など、多様な父母の要求に応えながら保育実践を積み重ね、乳幼児の発達保障と多くの父母の就労支援、地域の子育て支援の優れた保育行政をすすめてきました。

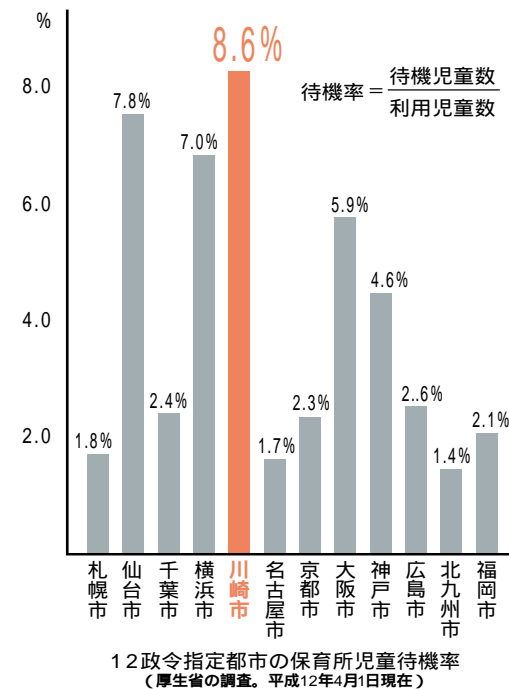
このように父母と保育士・行政が一体となりがんばってきた結果(公立保育園88カ所、私立保育園21カ所)が市民にも支えられ、今日の“子育てしやすい川崎”をつくってきたのです。しかし、いま、父母の間からは「保育園に入れてほしい」「一時保育をしてほしい」「病気明け保育を実施して」などのさまざまな要求が出ており、早急にこうした支援策をとることが求められています。

でも、いまの川崎の現実、
入所を待っている子どもがたくさんいます



「父親がリストラにあいました。母親が働かなくてはならないのに、いま動いていないと保育園に入れなさいといわれました」
「育休をとりたいけれど、途中入所は無理といわれました。仕方なく3月までで切り上げました」など、いま父母の間からこのような切実な声や、要望が出ています。

政令市でダントツ 川崎市の保育園待機率



ここ数年、川崎市の保育園待機児童数は増加の一途をたどっています。女性の就労人口が半数を超える中、少子化が進行する中でも、結婚・出産後も働き続ける女性が多くなっており、保育園に入所を希望する人はますます増えています。

それなのに、いま、保育園に入りたくても入れない保育園待機児童は2,475人もいます(平成12年10月1日現在)。

また、待機率では全国の12政令指定都市中、ワースト1位(左グラフ)という状況です。保育園の待機児解消は待ったなしです。

なぜ、こんな状況に...
税金の使い方が逆立ちしているからです



「保育園を増やして」という父母からの強い要望にもかかわらず、高橋市政は、「財政が厳しい」「お金がない」といって、これらの願いに応えようとせず、この間、認可保育園を1つも増設してきませんでした。

しかし、本当に保育園を1つも増設できないほど、川崎市の財政は厳しいのでしょうか。